

建築家から見る 土木とステークホルダーとは

「取材協力者」

内藤 廣氏 正会員 建築家、東京大学名誉教授

「温近知新」とは「温故知新」にヒントを得て、最近の実例から学生目線で将来を展望する企画である。本企画では、2022年3月末に全ての整備事業を終えた高田松原津波復興祈念公園^(注)(以下、復興祈念公園)を対象として、プロジェクトに深く携わった方々に3回連載でインタビューし、各者が抱いている土木的視点やプロジェクトに対する考え方の共通点・違いを明らかにする。今回は、設計を担当した内藤廣氏に建築の立場から語っていただいた。

(2022年6月21日、オンラインにて)

内藤廣氏と 復興祈念公園の関わり方

岩手県の津波防災技術専門委員会という防潮堤の高さを決める委員会に入ったことが、復興祈念公園に関わるきっかけです。防潮堤の高さを決めることは、その後のまちづくり全体を左右することとなります。まちづくりの根幹となる委員会に参加

し、行政側の各主体のさまざまな思惑を知ることになります。これが後に参画した高田松原地区震災復興祈念公園構想会議での判断につながったと思います。この委員会では委員を務めていたのですが、コンサルタントからの提案を審議するだけでは多くの人が思うような結果を得られないと思つたので、委員会を抜けさせてもらって、設計者として提案す

る側に回ることにしました。

市民はまちづくりの 重要なステークホルダー

発災後、何も頼まれなくても、月に1度は被災地に立つと決めていました。そのうちに役割が増えていき、全部で16の委員会に加わり、10年間で200回以上、三陸に通うことになりました。復興事業では、外部の人間である私たちは、あんなにひどいことが起きてしまったのだから、100年後にもメッセージを伝えるためにも遺構を残すべきだと考えてしまいがちです。一方で、身近に犠牲者がいる方には、震災について一刻も早く忘れたい、と思つている人もたくさんいます。このような状況で、どうすれば被災者の方たちの気持ちに寄り

添うことができるでしょう。そのためには、可能な限り現地の方たちと会う必要があります。はつきりとした追悼の場がほしいと思つている人がいる一方で、海を見たくないといい方もいます。海に向かう明快な軸線と柔らかなランドスケープで、これらの相反する気持ちを調整できないかと模索しました。

委員会などで土木に関わっている人にとっては、市民の気持ちに寄り添う発想を持てるかどうかはとても大切なこと。大切な決断を迫られる立場の人ほど現地の温度感を知るべきです。そこからいろいろな判断を積み上げていくべきだと思います。

実際に、復興祈念公園を手掛けていく時に、被災した遺構を残すか残さないかという議論が持ち上がりま



内藤 廣氏

NAITO Hiroshi

横浜市出身。早稲田大学大学院修了後、国内外での経験を経て独立。2001～2011年東京大学教授、副学長を歴任。2011年～同大学名誉教授。



写真1 高田松原津波復興祈念公園 (写真提供: 内藤廣建築設計事務所)

した。先ほど言ったように、私たちから見ると残した方がいいと考えますが、決して私たちだけの思い込みで決断してはいけません。その中で、陸前高田青年会議所の方が、「やはり言葉だけでは、次の世代に震災の記憶を残すのは無理だ」と言ってくださり、それがきっかけで他の市民の委員も遺構を残す方向の発言をされました。

市民の方が自ら決断し行動するところが大切で、そのような人の存在は復興事業において実はとても大きいのです。僕ら建築家や土木技術者は、基本的にお手伝いしかできません。震災に限らず、まちづくりでは主体である市民の存在が大切です。

「想像力を広げること」が私たちにできること

市民の方の想像力の幅を広げることに関しては、われわれが手助けできるテリトリーだと考えています。遠い将来についてどう考えるか、暮らしているまちだけでなく、周辺地域を含めた広い視野に目を向けてもらうこと、まちの歴史や未来について考えてもらうことは、まちづくりにおいてとても大切です。

また、皆さんがよく言う「市民」とは、いったい誰を指しているのでしょうか。私は、表に立って発言している人のみが市民ではないと思っています。その後ろに、あまり大声で声を上げないたくさんの方がいるはず。これは現時点での空間的な広がりです。また、すでに亡くなった方、未来の子どもたち、これは時間軸の広がりです。彼らも含めた会うことのできない無数の人たちが本当の意味での市民だと思っています。大きな決断をするときは、これらの会えない人たちの意見も想像してみることが大切です。土木や建築に関わる人たちに

とって、このような想像力こそが実は最も重要な素養なのではないかと思っています。

事業を進める上で必要なことは「イメージの共有」

今回の復興事業のように、多くのステークホルダーと事業を進める形は、まさにラグビーチームのような形だと思っています。いろいろなタイプの人がチームにとって必要です。ね。さまざまな分野の専門家が携わっている事業では、そんな考え方が重要です。役割分担して終わりという発想ではなく、目指す目標に向かって皆で協力して事業を進めるためには、目標となるイメージが必要です。それさえ共有できていれば、分野の違いについて考えることは、なくなるのではないのでしょうか。復興祈念公園の事業では、良いチームができ、イメージを共有して皆で協力して事業を進めることができました。思っています。

若い世代が未来を考えるために

今、社会は未来を提示できていま

せん。つまり、人々が目指したいと思うような未来像が存在していないということ。目指したいと思える未来があったら、そのために人々は自ら進む道を選ぶはず。でもそうならないのは、社会が信じられるだけの未来を提示できていないから。そのための想像力を社会が欠いているから。未来を提示したり想像したりするきっかけは、文学でも漫画でも音楽でも何でもいいのです。その中に目指したいと思える価値があって、多くの人がその未来を信じられれば、それは必ず現実のものになります。また、現在から未来を見るだけでなく、その未来にワーブして、そこから現在を見て、今ってどう見えるのだろうか。想像してみる。そんなことをしてみることが、若い世代が未来を考えるきっかけになるかも知れません。

(注1) 東日本大震災の犠牲者への追悼と鎮魂、震災の記憶と教訓の後世への伝承とともに、国内外に向けた復興に対する強い意志の発信のため整備された公園。(財)公園財団(2022) 高田松原津波復興祈念公園 運営追悼・祈念施設 (<https://takatamatsubara-park.com/>) (参照: 2022年9月21日)

(学生編集委員: 橋本美月、植野弘子、宮田比奈、松永葵)